2

事例2　シネマテークたかさき［群馬県高崎市］

特定非営利活動法人 たかさきコミュニティシネマの活動

志尾睦子

たかさきコミュニティシネマの設立趣旨

特定非営利活動法人たかさきコミュニティシネマは設立の趣旨を下記の通りとしている。

映画映像文化の豊かな未来を築くためのひとつの方策として、映画上映環境の地域的な格差と上映作品の画一化を避けるために、歴史的にも、地理的にも広い範囲から選ばれた作品をオリジナルな状態で鑑賞する機会を増やしていく必要がある。そのことによって、柔軟な鑑賞能力をもった幅広い観客層が形成されるとともに、映画映像史的な展望をもった新たな作家が登場し、映画映像表現の不断な更新が行われてゆくことになる。豊かな映画映像環境を育むため、その普及と継続のため活動してゆくことを目指す。
これまでの公共上映的な活動を続けてきた高崎映画祭運営組織や自主上映団体、美術館、博物館、図書館、学校などと連携をはかりながら活動を継続発展していくことを目的とする。

NPO法人たかさきコミュニティシネマ

設立日：2004年6月7日	［**主な事業内容**］
群馬県高崎市あら町202番地一文字屋ビル TEL: 027-325-1744　FAX: 027-326-1311 http://takasaki-cc.jp/	• **シネマテークたかさき運営事業** • **出張上映他地域の映画映像に関わる事業** • **高崎フィルム・コミッション運営事業**（平成26年4月より） • **高崎電気館運営受託事業**（平成26年10月より）

たかさきコミュニティシネマの事業

上記の設立の趣旨に基づき、下記の事業を行っている。

1.「シネマテークたかさき」運営事業

2004年12月に58席の1スクリーンで開館し、2007年12月に64席のスクリーンを増設した。現在2スクリーン体制で都内のミニシアターと同様のラインナップで運営している。専従の劇場スタッフは4名、他の事業とのかけ持ちのスタッフが2名、アルバイト6名で、シネマテークたかさきの日常業務を遂行している。
設立時からの一貫した映画館に対する公的な援助として、高崎市からの「コミュニティ施設活動支援事業」として年間120万円の助成金と、高崎市内に全戸配布される広報誌（約16万部）への上映情報掲載がある。設立当初からの3年間は、高崎市の助成は中心市街地活性化の面から家賃補助としてのものだったが、4年目からはコミュニティ施設活動支援としての助成金となった。

コミュニティ施設活動とは、

①地域のコミュニティ施設として映画館を運営していくことを広く市民に知っていただくこと
②「まちなか」の文化交流スポットとしての役割を推進すること
③中心市街地の活性化と賑わいに寄与すること

を目的とした活動で、これを行うための事業費として120万円を上限に、総事業費の3分の1が助成される。これは映画館施設内で開催する事業に限られ、通常上映の他に、周辺商店街や他機関とのコラボ

シネマテークたかさき［概要］

所在地：群馬県高崎市あら町202番地（JR高崎駅西口より徒歩5分）※1966年（昭和41年）開業の旧新潟中央銀行跡地を改装。

■シアター1／開館年月日：2004年12月4日／座席数：58席	■シアター2／開館年月日：2007年12月15日／座席数：64席
床面積：119㎡（劇場のみ69.49㎡／ロビーのみ49.51㎡） 天井高：3,800mm スクリーンサイズ：ビスタサイズ（2,000×3,700mm） シネスコ（2,000×4,700mm） 映写設備：35mmフィルム映写機（88年製） NEC NC900-A　DLPシネマプロジェクター 音響：SRD（ドルビーデジタル） 改装費：3,000万	床面積：103㎡（劇場のみ85.69㎡／ロビーのみ17.5㎡） 天井高：3,655㎜ スクリーンサイズ：ビスタサイズ（1:1.85／1,800×3,33mm） シネスコ（1:2.35／1,700×3,99mm） 映写設備：35mmフィルム映写機（88年製） NEC NC900-A　DLPシネマプロジェクター 音響：SRD（ドルビーデジタル） 改装費：5,000万

過去2年実績（平均値）　興行収益：約36,000,000円　公開本数：140作品

2015（平成27）年　コミュニティ施設活動の例

6月1日（月）　『千年の一滴』シネマアカデミー	**11月8日（日）　『犬に名前をつける日』シンポジウム**
映画のテーマに即して、その分野の学識経験者らを招いて講演会を行う「シネマアカデミー」第1弾。生しいたけの生産がさかんな群馬県。きのこを全般に研究されている、高崎健康福祉大学の熊倉慧助教をお招きし、講演会を行った。	高崎市内で動物愛護活動を行うNPO団体と連携し、上映前に高崎市内での動物保護活動の取り組みと、高校生から一般までを交えて、殺処分の現状と今後の対策について、パネルディスカッションを行った。
8月16日（土）　『ジェームス・ブラウン 最高の魂を持つ男』スクリーントーク	**2016年1月8日（金）まで　『愛と哀しみのボレロ』**
高崎市出身の音楽研究家・佐藤良明さんによるスクリーントーク。アメリカの音楽家・ジェームス・ブラウンが生きた時代、黒人解放に至るまで、黒人としての地位を確立するまで、音楽家として新しい時代を切り拓いた軌跡をたどった。	群馬交響楽団ニューイヤーコンサートのテーマ「ボレロ」にちなみ、音楽と映画のまち高崎を体感してもらえるよう相互で連携を図った。
9月26（土）〜10月8日（金）　『黒蜥蜴』『黒蜥蜴を探して』	**2016年3月6日（日）　『オペラの怪人』ピアノ伴奏、弁士つき上映**
高崎音楽祭2015との連動企画上映を行った。本年は、音楽祭のゲストである美輪明宏氏の出演作とドキュメンタリーを上映し、相互の連携を図った。	ピアノ伴奏に新垣隆さん、弁士にハルキさんを迎え、サイレント映画を上映。映画の草創期、どのように映画が上映されていたのか、映画文化の原点を知っていただきくとともにその醍醐味を味わう上映会を行った。

レーション企画に関わる経費、テーマを決めたスクリーントーク開催に関する経費等がこの項目に当たる。この助成では、講師謝金や宣伝費が必要経費として認められるため、幅広い企画を柔軟に考えることができる。映画監督をお招きしての映画塾の開催や、映画のテーマに沿った関連機関の専門家をお招きしてのスクリーントーク、子どもたちに映画の楽しさを伝えるこども映画教室の開催などを行っている。上映作品についても地域のイベントや活動に連動した上映を積極的に取り入れている。

また「音楽の街・高崎」にちなみ、音楽映画の上映を積極的に取り入れ、上映に際しては特別チラシの作成や周知活動にも力を入れている。無声映画の上映の際には群馬交響楽団のソリストをお招きして即興演奏付き上映を行うなどをしてきた。

シネマテークたかさきの上映作品は、コミュニティシネマ活動の概念に基づき、映画の多様性を確保したラインナップであるが、映画館設立当初は、そうした作品で映画館経営を成り立たせていくのは至難であった。映画を上映することだけで精一杯で、そこからさらに広がりのある上映活動には資金を捻出できずにいた。

助成金をいただく場合、通常上映に加えてプラスアルファの事業をすることを求められる。家賃補助から切り替わった平成19年度時点は、1年間の事業計画を立てることすら困難であった。いわば、「背伸びをする」期間を助成金によって与えられ、積極的にそこに挑んだ形となったが、続けていくうちに市民の要望やコミュニティ施設としての機能がどこにあるかが見えてきた。商店街、他機関とのコラボレーションを積極的に行うことで、その都度新しい観客を開拓している実感を得ることができた。またミニシアターというと、敷居が高い、難しい映画をやっていると思われがちなイメージが、こうした活動を通じて、行きやすい場所、時間があったときにちょっと立ち寄って街の情報を得る場所、に徐々に変わってきていると感じている。こうしたことは、コミュニティシネマの概念の元に展開されることであり、助成金によって、シネマテークたかさきの映画上映に関わる活動は成長をしていると言える。

2. 出張上映――他地域の映画映像に関わる事業

この項目に対する直接的公的支援はないが、事業展開において、高崎市や公共ホールとの連携が欠かせず、情報共有と事業展開への協力を受けている。この事業については専従スタッフが1名、他事業とのかけ持ちスタッフが1名で当たっている。

①高崎映画祭運営委員会より事務局機能を受託

たかさきコミュニティシネマは、高崎映画祭の活動が発展した形で形成されている。高崎映画祭は全てがボランティアスタッフでの運営であり、現在も別団体であるが、2014（平成26）年より事務局機能を高崎映画祭運営委員会から受託している。

高崎映画祭［概要］

1987年　第一回高崎映画祭開催／主催：高崎映画祭運営委員会

以降毎年開催。2016年で30回を迎えた。毎年3月から4月の上旬にかけて16日間開催。
高崎市内の公共ホール、およびシネマテークたかさきを上映会場に約60作品を上映する。

②地域上映の実施及び映画文化発展のための講演会・教育事業

この事業は、シネマテークたかさきの外へ出て行うものである。県内の出張上映および地域の活動に積極的に映画上映を働きかけ、年間を通じて上映活動を行っている。映写技師の派遣や企画の持ち込み、自主企画での上映活動など多岐に渡るよう心がけている。また映画上映のみならず、映画文化発展のための周知活動として他団体へ出向いての講演活動や大学での講義も行っている。
2016年には、高崎映画祭主催のこども映画教室に協力した。

2015（平成27）年　出張上映他地域の映画映像に関わる事業例

開催日	会場	上映会名	内容	主催および共催団体
6月1日（月）	シネマまえばし	上映会	映写技師派遣	NPO法人前橋芸術週間
6月21日（日）	玉村町文化ホール	『お盆の弟』 完成披露試写会	作品手配／機材手配 映像機器オペレーション	玉村町『お盆の弟』 上映委員会
7月27日（月）	金沢市	上映会	映写技師派遣	ギンレイホール
10月2日（金）	シネマまえばし	上映イベント	映写技師派遣	世界のCMフェスティバル 群馬実行委員会
10月18日（日）	群馬県立館林美術館	上映会	映写技師派遣	群馬県立館林美術館
10月24日（土）	高崎電気館	市長杯囲碁大会 スポーツ文化講演会	映写技師派遣／イベント運営	中央地域づくり活動協議会
11月28日（土）	高崎電気館	『ベアテの贈りもの』 上映イベント	映写技師派遣	高崎男女共同参画課
2月27日（土）	高崎電気館	上映イベント	映写技師派遣	ぐんま学生映像祭実行委員会

3. 高崎フィルム・コミッション運営事業（2014（平成26）年4月より）

高崎フィルム・コミッションは2003（平成15）年、高崎市観光課内に設立された。東京からの距離と手厚いサポートから撮影件数は年々増加し、数々の作品に携わってきた。設立から10年経った頃、民間への業務移管が検討された。たかさきコミュニティシネマは、設立当初から映画・映像の製作を事業目的に掲げていたことから、高崎市と当法人とで話し合いを持ち、2014（平成26）年に高崎市から業務を移管されることになった。当法人で新たにフィルム・コミッション事業を開始するにあたり、これまでの高崎市の実績と方針を受け継いでさらに活動を深めるためには専従の人材が必要となるため、人件費を加味した補助金の交付を受けることが叶った。高崎フィルム・コミッション事業に関する補助金額は730万円。内訳は、市の嘱託職員の規定による人件費2名分と啓発事業費、運営管理費である。専従の

高崎フィルム・コミッション［概要］

2003（平成15）年4月1日　高崎市役所観光課に設置される
2014（平成26）年4月1日　高崎市からたかさきコミュニティシネマへ業務移管

事務局所在地：〒370-0815　高崎市柳川町31　高崎電気館内
TEL: 027-395-0483　FAX: 027-395-0484

事業内容

■撮影支援
- ロケ候補地に関する情報提供
- ロケに関する問い合わせや相談への対応
- 各種許認可に関する情報提供
- シナハン、ロケハンへの同行案内やロケ現場立会いなどの現場対応
- 宿泊施設、駐車場、お弁当などロケ時に必要な支援情報の提供
- ボランティアエキストラの手配協力　など

■ロケーション撮影の誘致
- ホームページによる情報提供
- ロケーション・データベースの拡充
- ロケ誘致のための PR活動（制作会社・プロダクション等への PR等）など

■地域への啓発・広報
- イベント開催や各団体広報誌を活用しての周知・啓蒙　など

2014年からの主な支援作品

■テレビ
『紅雲町珈琲屋こよみ』NHK放送
『土曜ドラマ64（ロクヨン）』NHK放送
『弱くても勝てます』日本テレビ
『世界はひばりを待っている』NHKBS
『High & Low season1』日本テレビ

■映画
『お盆の弟』アルゴピクチャーズ配給
『セーラー服と機関銃～卒業～』KADOKAWA配給
『64－ロクヨン－前編／後編』　東宝配給
『High & Low the movie』松竹配給
『14の夜』スポッテッドプロダクションズ配給

スタッフ1名、かけ持ちのスタッフが1名、現場ごとに適宜アルバイトを雇い入れてこの事業に当たっている。年間の相談件数は約130件、うち実施件数は約半数である。

高崎フィルム・コミッションの特徴としては、行政から移管された経緯もあり、様々な公的機関での撮影の際には、ノウハウのある行政からの厚い協力が得られることが一番に挙げられる。また、たかさきコミュニティシネマが映画館の運営や映画祭の事務局を担っているために、撮影した映画をシネマテークたかさきや高崎映画祭で上映したり、宣伝展開に直接的な協力ができることも挙げられる。映画・映像を作るところから人の目に触れるところまで、ひとつの窓口が責任を持って対応できることは映画制作者にとっても利点となると思われる。

2015年に撮影した『セーラー服と機関銃～卒業～』では、高崎市をあげての全面協力体制で撮影が進んだ。高崎市で撮影された映画として、高崎市を窓口にした市民公募の試写会が開かれ大きな盛り上がりを見せた。広報活動に関わる面でも公的な援助によるところが大きい。

4. 高崎電気館運営受託事業（2014（平成26）年10月より）

高崎電気館は1913（大正2）年に、高崎初の映画館として誕生した映画館である。大映、日活、松竹など時代ごとに専属契約を結び運営してきた。2001年にオーナーの病気療養のため休館となり、その後閉館となった。建物1階部分にテナントで入っていた飲食店は営業を続けていた。映画館自体は、機材が撤去されることもなく、ずっと在りし日の姿のままで立ち続けており、市民からは古き良き映画館の再生を望む声が多く寄せられていた。2013年が高崎電気館の創立から100年に当たる年ということで、高崎映画祭とシネマテークたかさきと市民有志の働きかけで、二日限りの「復活祭」が行われた。1階部分の100席ほどの劇場で、映画上映が行われ、二日間で約500人の映画ファンが詰めかけた。そこから電気館再生の機運が高まり、多くの市民の声が後押しする形で映画館再生に向けて動き出した。

日本国内から姿を消しつつある古い地場産業の映画館建物と、35ミリフィルム映写機は、いまや“文化遺産”となっている。「映画の街・高崎」として、その文化遺産を守り、後世に大切に届けようということで、高崎市がその再生に積極的に乗り出し、協議を重ねる中で、2014年故オーナーの夫人が映画館の土地建物を高崎市に寄贈することになった。

高崎市は高崎電気館を市の施設として運用する際に、1階のテナント部分を改修し、地域活性化センターとして市民が様々に利用できる集会室と研修室を設置した。2階の劇場（256席）は映画館として運用することを決定し、シネマテークたかさきが上映に関わる事業の委託を受けることとなった。

2015年は毎月『ここに泉あり』の無料上映を行った（＊県所有プリント／現在は隔月）。現在は、名画座として

高崎電気館（高崎市地域活性化センター）［概要］

開館年月日：2014年10月1日
所在地：〒370-0815　高崎市柳川町31
TEL: 027-395-0483　FAX: 027-395-0484
2F劇場　座席数256席　床面積348.8㎡
スクリーンサイズ　シネスコ（1:2.35）9,200㎜×3,900㎜
映写設備　35mmフィルム映写機　NEC NC900-A
DLPシネマプロジェクター
音響　ドルビー CP500 5.1ch
1F研修室　座席数　70席（96.3㎡）
1F集会室　30名程度収容可能（49. 6㎡）

2014年からの主な上映作品

- 『男はつらいよ』シリーズ上映（不定期）
- 市川雷蔵祭〈映画デビュー60周年 雷蔵祭～初恋～〉（14作品）
- 市川雷蔵祭〈映画デビュー60周年 雷蔵祭～初恋～／アンコール〉（10作品）
- 若尾文子映画祭
  青春 part1（6作品）／part2（12作品）／part3（12作品）
- 小栗康平監督全作品特集（5作品）
- 『東京裁判』小林正樹監督作品
- 爆音映画祭（5作品）
- 特集「岸惠子」（5作品）

35ミリフィルムでの上映をメインにしているが、デジタル化された旧作のラインナップも上映できるように、DCP対応プロジェクターも完備している。高崎電気館の上映業務については、通常上映時は専従スタッフ1人、アルバイト2人。イベント上映の際には増員し、業務に当たる。1階の研修室及び2階の劇場の貸し館業務も請け負っている。委託事業費は、映写技師人件費、及び受付アルバイトスタッフ2人分の人件費、映画料他上映に関わる費用として1年間1600万円。上映ラインナップは1950年代から60年代の日本映画を中心に、35ミリフィルム上映を主にしているが、名画のデジタルリマスター版も多く出てきているためDCP上映も行っている。高崎電気館の建物自体を高崎の映画文化の発信地として位置付けているため、高崎映画祭の上映会場としての活用や、フィルム・コミッションの支援で撮影された映画の試写会や、上映会も積極的に行っている。名画座のプログラムにはご年配者の来場が多いが、様々なイベント上映も合わせてすることで来場数も観客層も格段に広がっていることを実感している。

最後に

たかさきコミュニティシネマの前身である高崎映画祭の成り立ちは、とてもシンプルなものだった。「なかなか地方でみることができない映画をみたい」という地方に住む映画ファンの鑑賞欲求がスタートだったからだ。そうして立ち上がった高崎映画祭は「みたい」から「みせたい」に変化し、個人的な欲求を超えて地域の文化活動として発展してきた。映画祭活動の充実を図る中で見えてきたことは、日常的に多様な映画を鑑賞できる〈場〉の必要性であった。そこから群馬県内初のミニシアターを立ち上げるという構想に至るわけだが、この映画館という〈場〉には、地域文化活動の拠点としての意義がなければならない。それこそがコミュニティシネマ活動に結びつくからである。

映画館運営だけにとどまらない活動を視野に入れ、NPO法人たかさきコミュニティシネマは設立されている。私たちは、映画館「シネマテークたかさき」を軸にしながら、地域の映画映像文化活動の充実と発展を目指してきたのである。もちろん、軸となる映画館の運営を、まず第一に整えていくことが先決であるため、非常に厳しい労働環境と経営状態で、なんとか10年持ちこたえてきたというのが実状である。しかしながら、その中で地域との連携、行政や市民の理解を得ることができ、NPO法人たかさきコミュニティシネマとしての事業展開を少しずつ図ることができるようになってきたのである。

定期的な委託業務を受けるという形の「公的な支援」によって、当法人の活動の幅は確実に広がっている。定期的な委託業務があることは、安定した経営活動につながるが、一方で業務の充実を目指せば人材の確保、育成は必須事項である。若い人材と少ない人数で始めた法人の活動を、人材面でどのようにつなげ、継続して行くかも課題である。また、公的な支援がなくなった際に、全ての機能がストップしてしまうことのないように、自立した経営基盤と、地域コミュニティとしての存在意義を保つことが何より一番大事なことだと心している。

志尾睦子（しおむつこ）NPO法人たかさきコミュニティシネマ代表